

十返舎一九「東海道中膝栗毛」「続膝栗毛」と草津宿

4月末から5月初めはゴールデンウィーク。全国各地へ旅行に出かけられる方も多いのではないのでしょうか。また、2012年から2013年の年末年始にかけて民間旅行社の統計では旅行に出かける人数は3,000万人台にのぼるとしています。

このような旅のブームは、江戸時代にもありました。そのブームを巻き起こした要因のひとつが「弥次さん・喜多さん」でお馴染みの『東海道中膝栗毛』の大ヒットです。作者は十返舎一九で、登場人物の弥次さん・喜多さんが繰り広げる内容の滑稽さもあって当時はベストセラーとなりました。

この「東海道中膝栗毛」は、享和2年(1802)に「浮世道中膝栗毛 完」と題して品川から箱根までが刊行されました。これが好評で、「浮世道中膝栗毛 後編」と題して箱根から岡部までを出版。この後編もヒットし、「東海道中膝栗毛」の表題を変えて東海道を西へ、そして伊勢参り、大和、大坂、京見物の道中での滑稽話を展開し、八編までが出版されたのです。

さらに、続いて「続膝栗毛」が出版されます。文化7年(1810)刊行の初編は金毘羅参詣、翌8年刊行の二編で宮島参詣を、文化9年刊行の第三編で大津から木曾街道(中山道)を紹介しています。この「続膝栗毛」は第三編で、いきなり大津へと戻っており、もともと「東海道中膝栗毛」に続いて、大津から木曾街道を東へと向かう「続膝栗毛」を刊行する予定でしたが、当時金毘羅や宮島への旅が流行ったため急きょ続編の最初に加えたようです。

第三編の大津では、大津絵や算盤の名産を見、膳所の城下では拾い物をして、小判か何かと勘違いし大事に仕舞い置いて、瀬田の茶店で開けると迷子札であったり、さらに道を進め、草津立場のうばがもちやを経て草津宿へとやってくると、その日は矢橋の鞭崎八幡宮の祭礼で、祭礼見物に出かけるにあたってひと騒動があったり。そして、守山、野洲川からさらに旅は続いていきます。文政2年(1819)に善光寺へ、そして上州草津温泉から、文政5年には江戸までを完結しています。このようによく知られた「東海道中膝栗毛」、草津は本編でなく続編のなかで登場しています。

